

入れ札

菊池寛

青空文庫

じょうしゅう　いわはな　くにさだちゅうじ
上州岩鼻の代官を斬り殺した国定忠次一家の者は、
あかぎやま　こも　とりかた　そそこ
赤城山へ立て籠つて、八州の捕方を避けていたが、其処も防
ぎきれなくなると、忠次を初め、十四五人の乾兎は、ようやく一方の血
路を、研り開いて、信州路へ落ちて行つた。

夜中に利根川とねがわを渡つた。渋川の橋は、捕方が固めていたので、
一里ばかり下流を渡つた。水勢が烈はげいため、両岸に綱を引いて
渡つたが、それでも乾兎の一人は、つい手を離したため流されて
しまつた。

渋川から、伊香保街道いかほに添うて、道もない裏山を、榛名はるなにかか
つた。一日、一晩で、やつと榛名を越えた。が、榛名を越えてし

まうと、直ぐ其処に大戸おおどの御番所があつた。

信州へ出るのには、この御番所が、第一の難関であつた。この
関所をさえ越してしまえば、向うは信濃境しなのざかいまで、山又山が続い
ているだけであつた。

忠次達が、関所へかかつたのは、夜の引き明けだつた。わずか、
五六人しか居ない役人達は、忠次達の勢いきおいおそに怖れたものか、彼等の
通行を一言も咎めなかつた。

関所を過ぎると、さすがに皆は、ほつと安心した。本街道を避
けて、裏山へかかつて来るに連れて、夜がしらじらと明けて來た。
丁度上州一円に、春蚕はるごが孵化かえろうとする春の終の頃であつた。山
上から見下すと、街道に添うた村々には、青い桑畠くわばたが、朝靄あさもやの

裡に、何処までも続いていた。

関東縞の袷に、鮫鞘の長脇差を佩して、脚絆草鞋で、厳重な足ごしらえをした忠次は、菅のふき下しの笠を冠つて、先頭に立つて、威勢よく歩いていた。小鬢の所に、傷痕のある浅黒い顔が、一月に近い辛苦で、少し蹇やつれが見えたため、一層凄味すさまじみを見せていた。乾兎も、大抵同じような風体ふうていをしていた。が、忠次の外は、誰も菅笠を冠つてはいなかつた。中には、片袖かたそでの半分断れかけている者や、脚絆の一方ない者や、白っぽい縞の着物に、所々血を滲ませていてるものなども居た。

街道を避けながら、しかも街道を見失わないように、彼等は山から山へと辿たどつた。大戸の関から、二里ばかりも来たと思う頃、

雜木の茂つた小高い山の中腹に出ていた。ふと振り顧みると、今まで見えなかつた赤城が、山と山の間に、ほのかに浮び出でていた。

「赤城山も見收めだな。おい、此處ここいらで一服しようか」

そう云いながら、忠次は足下に大きい切り株を見付けて、どつかりと、腰を降した。彼の眼は、暫らくの間、四十年見なれた懐しい山の姿に囚とらわれていた。赤城山が利根川の谿谷へと、緩い勾配を作つている一帯の高原には、彼の故郷の国定村も、彼が売出しの当時、島村伊三郎を斬つた境の町も、彼が一月前に代官を斬つた岩鼻の町もあつた。

國越くにごえをしようとする忠次の心には、さすがに淡い哀愁が、感ぜられていた。が、それよりも、現在一番彼の心を苦しめている

ことは、乾児の始末だつた。赤城へ籠つた当座は、五十人に近かつた乾児が、日数が経つたに連れ、二人三人潛かに、山を降つて逃げた。捕方の総攻めを喰つたときは、二十七人しか残つていなかつた。それが、五六人は召捕られ、七八人は何処ともなく落ち延びて、今残つてゐる十一人は、忠次のためには、水火をも辞さない金鉄の人々だつた。国を売つて、知らぬ他国へ走る以上、この先、あまりいい芽も出そうでない忠次のために、一緒に関所を破つて、命を投げ出してくれた人々だつた。が、代官を斬つた上に、関所を破つた忠次として、十人余の乾児を連れて、他国を横行することは出来なかつた。人目に触れない裡に、乾児の始末を付けてしまひたかつた。が、みんなと別れて、一人ぎりになつてしまふ。

うことも、いろいろな点で不便だつた。自分の 目算通り^{もくさんどおり}に、信州追分^{おいわけ}の今井小藤太の家に、ころがり込むにしたところが、国定村の忠次とも云われた貸元が、乾児の一人も連れずに、顔を出することは、沽券^{こけん}にかかることだつた。手頃の乾児を二三人連れて行くとしたら、一体誰を連れて行こう。そう思うと、彼の心の裡では、直ぐその顔触^{かおぶれ}が定まつた。平生の忠次だつたら、

「おい！ 浅に、喜蔵に、嘉助^{かすけ}とが、俺と一緒に来るんだ！ 外の野郎達は、銘々思い通りに落ちてくれ！ 路用^{ろよう}の金は、分けてやるからな！」

と、何の拘泥^{こだわり}もなく云える筈だつた。が、忠次は赤城に籠つて以来、自分に対する乾児達の忠誠をしみじみ感じていた。鰯^{かつお}

節や生米を噛つて露命を繋ぎ、岩窟や樹の下で、雨露を凌いでいた幾日と云う長い間、彼等は一言も不平を滾きなかつた。忠次の身體が、赤城山中の地蔵山で、危険に瀕したとき、みんなは命を捨てて働いてくれた。平生は老ぼれて、物の役には立つまいと思われていた闇雲の忍松までが、見事な働きをした。

そうした乾児達の健気な働きと、自分に対する心持とを見た忠次は、その中の二三人を引き止めて他の多くに暇をやることが、どうしても気がすすまなかつた。皆一様に、自分のために、一命を捨ててかかつている人々の間に、自分が甲乙を付けることは、どうしても出来なかつた。剛愎な忠次も、打ち続くなん難で、少しは気が弱くなつてゐる故もあつたのだろう。別れるのなら、

いつそ皆と同じように、別れようと思つた。

彼は、そう決心すると、

「おい！ みんな！」と、周囲に散かつてゐる乾児達を呼んだ。
 烈しい叱しかり付けるような声だつた。喧嘩けんかの時などにも、叱咤しつたする忠次の声だけは、狂奔してゐる乾児達の耳にもよく徹した。

草の上に、蹲うずくまつたり、寝ころんだり、銘々思い思いの休息を取つていた乾児達は、忠次の一喝かつでみんな起き直つた。数日来の烈しい疲労で、とろとろ眠りかけているものさえあつた。

「おい！ みんな」

忠次は、改めて呼び直した。『壺皿つぼざらみ見透し』と、若い時綽名あだなを付けられていた、忠次の大きい眼がギロリと動いた。

「みんな！ 一寸耳ちよつとを貸して貰もらいてえのだが、俺おらあこれから、信州へ一人で、落ちて行こうと思うのだ。お前めえたち達だつを、連れて行きてえのは山々さんさんだが、お役人わざにんをたたつ斬ねつて、天下のお関所を破つた俺達が、お天道様てんとうさまの下を、十人二十人つながつて歩くことは、許されねえ。もつとも、二三人は、一緒に行つて貰いてえとも思うのだが、今日が日まで、同じ辛苦さうくをしたお前達みんなの中から、汝われは行け汝はは来るなど云う区別は付けたくねえのだ。連れて行くからなら、一人残らず、みんな一緒に連れて行きてえのだ。別れるからなら、恨みつこのねえように、みんな一様に別れてしまいてえのだ。さあ、ここに使い残りの金きんが、百五十両ばかりあらあ。みんなに、十二両ずつ、くれてやつて、残つたのは俺が貰つて行

くんだ。銘々に、志を立てて落ちてくれ！ 随分、身體に氣を付けろ！ 忠次が、何処かで捕まつて、江戸送りにでもなつたと聞いたら、線香の一本でも上げてくれ！」

忠次は、元気にそう云うと、胴巻の中から、五十両包みを、三つ取り出して、熊 笹くまささの上に、ずしりと投げ出した。

が、誰もその五十両包みに、手を出すものはなかつた。みんなは、忠次の突然な申出に、どう答えていいか迷つてゐるらしかつた。一番に、乾児達の沈黙を破つたのは、大間々の浅太郎だつた。
 「そりや、親方悪いりょうけん了 簡りょうけんだろうぜ。一体俺達が、妻子眷族けんぞくを見捨てて、此處までお前さんに、従いて來たのは、何の為だと思つたのだ。みんな、お前さんの身の上を氣遣つて、お前さんの落

着くところを、見届けたいと思う一心からじやないか。いくら、大戸の御番所を越して、もうこれから信州までは大丈夫だと云つたところで、お前さんばかりを、一人で手放すことは、出来るものじやねえ。尤も、こう物騒な野郎ばかりが、つながつて歩けねえのは、道理ことわりなのだから、お前さんが、此奴こいつだと思う野郎を、名指しておくんなせえ。何も親分乾児の間で、遠慮することなんかありやしねえ。お前さんの大事な場合だ！ 恨みつらみを云うような、ケチな野郎は一人だつてありやしねえ。なあ兄弟！」

みんなは、異口同音に、浅太郎の云い分に賛意を表した。が、そう云われてみると、忠次は尚なおさら更選みかねた。自分の大事な場所であるだけに、彼等の名前を指すことは、彼等に対する信頼の

差別を、露骨に表わす事になつて来る。それで、選に洩れた連中と——内心、忠次を怨むかも知れない連中と——そのまま、再会の機おりも期し難く、別れてしまわねばならぬ事を考えると、忠次はどうしても、気が進まなかつた。

忠次は口を噤つぐんだまま、何とも答えなかつた。親分と乾児との間に、不安な沈黙が暫らく続いた。

「ああ、いい事があらあ」しゃか釈迦の十藏と云う未だ二十二三の男が叫んだ。彼は忠次の盃さかづきを貰つてから未だ二年にもなつていなかつた。

「籤引くじびきがいいや、みんなで籤を引いて、当つた者が親分のお供をするのがいいや」

当座の妙案なので、忠次も乾児達も、十歳の方を一寸見た。が、嘉助という男が直ぐ反対した。

「何を云つてやがるんだい！ 築引だつて！ 手前の様な青二才に籠が当つてみろ、かえ反つて、親分の足手纏まといじやねえか。築引なんか、俺あ真つ平だ。こんな時に一番物を云うのは、腕つ節だ。おい親分！ くだらねえ遠慮なんかしねえで、一言、嘉助ついて来いと、云つておくんなせい」

四斗樽しとだるを両手に提げながら、足駄あしだはを穿いて歩くと云う嘉助は一行中で第一の大力だつた。忠次が心の裡で選んでいる三人の中の一人だつた。

「嘉助の野郎、何を大きな事を云つてやがるんだい。腕つ節ばか

りで、世間は渡られねえぞ。ましてこれから、知らねえ土地を遍へん歴めぐつて、上州の国定忠次で御座いと云つて歩くには、駆引かけひきばんた万端まんぱんの軍師がついていねえ事には、どうにもならねえのだ。幾ら手前が、大力だからと云つて、ドジばか許り踏んでいちや、旅先で、飯にはならねえぞ」

そう云つたのは、松井田の喜蔵と云う、分別盛りの四十男だった。忠次も喜蔵の才覚と、分別とは認めていた。彼は、心の裡で喜蔵も三人の中に加えていた。

「親分、俺あお供は出来ねえかねえ。俺あ 腕うで節っぷしは強くはねえ。又、喜蔵の様に軍師じやねえ。が、お前さんの為には、一命を捨ててもいいと、心の内で、とつくに覺悟を極きめているんだ」

「やみくも 閻雲の忍松が、其処まで云いかけると、乾児達は、周囲から
口々に罵つた。

「何を云つてやがるんだい、親分の為に命を投げ出している者は、
手前一人じやねえぞ、巫山戯ふざけた事をぬかすねえ」

そう云われると、忍松は一言もなかつた。半白はんぱくの頭を、テレ
隠しに搔かいていた。

そうしているうちに、半時ばかり経つた。日光山らしい方角に
出た朝日が、もう余程きし登つていた。忠次は、黙々として、み
んなの云う事を聴いていた。二三人連れて行くとしたら、彼は籤
引では連れて行きたくなかった。やつぱり、信頼の出来る乾児を
自ら選びたかつた。彼は不図ふと一策を思い付いた。それは、彼が自

ら選ぶ事なくして、最も優秀な乾児を選み得る方法だつた。

「お前達の様に、そうザワザワ騒いでいちや、何時^{いつ}が来たつて、果てしがありやしねえ。俺一人を手離すのが不安心だと云うのなら、お前達の間で入れ札^{いふだ}をしてみちや、どうだい。札数の多い者から、三人だけ連れて行こうじやねえか。こりや一番、怨みつこがなくつて、いいだろうぜ」

忠次の言葉が終るか終らないかに、

「そいつあ思い付きだ」乾児のうちで一番人望のある喜蔵が賛成した。

「そいつあ趣向だ」大間々の浅太郎も直ぐ賛成した。

心の裡で、籤引を望んでいる者も数人あつた。が、忠次の、怨

みつこの無いように、しかも役に立つ乾児を、選ぼうと云う肚が解ると、みんなは異議なく入れ札に賛成した。

喜蔵が矢立^{やたて}を持つていた。忠次が懷から、鼻紙の半紙を取り出した。それを喜蔵が受取ると、長脇差を抜いて、手際よくそれを小さく切り分けた。そうして、一片ずつみんなに配つた。

先刻^{さつき}からの経路を、一番厭^{いや}な心で見ていたのは稻荷^{いなり}の九郎助だつた。彼は年輩から云つても、忠次の身内では、第一の兄分でなければならなかつた。が、忠次からも、乾児からも、そのようには扱われていなかつた。去年、大前田の一家と一寸した出入り^{でいり}があつた時、彼は喧嘩場から、不覚にも大前田の身内の者に、引つかつたがれた。それ以来、彼は多年培^{つちか}つていた自分の声望がめつきり落

ちたのを知つた。自分から云えば、遙かに後輩の浅太郎や喜蔵に段々凌しのがれて來た事を、感じていた。そればかりでなく、十年前までは、兄弟同様に賭場とばから賭場を、一緒に漂浪して歩いた忠次までが、何時となく、自分を軽んじてゐる事を知つた。皆は表面こそ『阿兄あにい！ 阿兄あにい！』と立ててゐるもの、心の裡では、自分を重んじていなことが、ありありと感ぜられた。

入れ札と云う声を聴いたとき、九郎助は悪いことになつたなあと思つた。今まで、表面だけはともかくも保つて來た自分の位置が、露骨に崩くずされるのだとと思うと、彼は厭な気がした。十一人居る乾児の中で自分に入ってくれそくな人間を考えてみた。が、それは弥助の他ほかには思い当らなかつた。弥助も九郎助と同様に、古

い顔であつて、後輩の浅太郎や、喜蔵などが、グングン頭を擡げて来るのを、常から快からず思つてゐるから、こうした場合には、きつと自分に入れてくれるだろうと思つた。が、弥助だけは自分に入れてくれるとしても、弥助の一枚だけで、三人の中に這入ることは考えられなかつた。浅太郎には四枚入るだろうと思つた。

喜蔵に三枚入るとして、十一枚の中、後へ四枚残る。その中、自分が一枚をのけると三枚残る。もし、その中、二枚が、自分に入れられていれば、三人の中に加わることは出来るかも知れないと思つた。が、弥助の他に、自分に入れてくれそうな人は、どう考へても当がなかつた。ひよつとしたら、並川なみかわの才助がとも思つた。あの男の若い時には、可成り世話を焼いてやつた覚えがある。

が、それは六七年も前のこととて、今では『浅阿兄、浅阿兄』と、浅にばかりくつ付いている。そう思うと、弥助の入れてくれる一枚の他には、今一枚を得る当は、どうにもつかなかつた。乾児の中で年頭としがしらでもあり、一番兄分でもある自分が、入れ札に落ちることは——自分の信望あてが少しも無いことがまざまざと表われることは、もう既定の事実のように、九郎助には思われた。不愉快な寂しい感じに堪えられなくなつて來た。

一本しか無い矢立の筆は、次から次へと廻つて來た。

「おい！ 阿兄！ 筆をやらあ」

ほんやり考えていた九郎助の肩を、つつきながら横に居た弥助が、筆を渡してくれた。弥助は筆を渡すときには、九郎助の顔を見

ながら、意味ありげに、ニヤリと笑つた。それは、たしかに好意のある微笑だつた。『お前を入れたぜ』と云うような、意味を持つた微笑であるように九郎助は思つた。そう思うと、九郎助は後のもう一枚が、どうしても欲しくなつた。後の一枚が、自分の生死の境、榮辱の境であるように思われた。忠次に着いて行つたところで、自分の身に、いい芽が出ようとは思われなかつたが、入れ札に洩れて、年甲斐としがいもなく置き捨てにされることがどうしても堪らたまなかつた。浅太郎や喜蔵の人望が、自分の上にあることが、マザマザと分ることが、どうしても堪らなかつた。

かれは、筆を持つてぼんやり考えた。

「おい！ 阿兄！ 早く廻してくんna！」

横に坐っている浅太郎が、彼に云つた。阿兄！ と云いながらも、語調だけは、目下を叱^{しつ}しているような口調だつた。九郎助は、毎度のことながらむつとした。途端に、相手に対する烈しい競争心が——嫉妬^{しつと}がムラムラと彼の心に渦巻いた。

筆を持つてゐる手が、少しブルブル顫^{ふる}えた。彼は、紙を身体で掩^{おお}いかくすようにしながら、仮名で『くろすけ』と書いた。

書いてしまうと、彼はその小さい紙片をくるくると丸めて、真中に置いてある空^{から}になつた割籠^{わりご}の蓋^{ふた}の中に入れた。が、入れた瞬間に、苦い悔悟が胸の中に直ぐ起つた。

「賭博^{ばくち}は打つても、卑怯^{ひきょう}なことはするな。男らしくねえことはするな」

口癖のように、怒鳴る忠次の声が、耳のそばで、ガンガン鳴りひびくような気がした。彼は皆が自分の顔を、ジロジロ見ているような気がして、どうしても顔を上げることが出来なかつた。

吉井の伝助は、無筆だつたので、彼は仲よしの才助に、小声で耳打ちしながら、代筆を頼んだ。

皆が、札を入れてしまふと、忠次が、

「喜蔵！　お前読み上げてみねえ！」と言つた。

皆は、緊張のために、眼を輝かした。過半数のものは諦めていたが、それでも銘々、うぬぼれは持つていた。壺皿を見詰めるような目付で、喜蔵の手許を睨んでいた。

「あさ、ああ浅太郎の事だな、浅太郎一枚！」

そう叫んで喜蔵は、一枚、札を別に置いた。

「浅太郎二枚！」彼は続いてそう叫んだ。

又、浅太郎が出たのである。浅太郎が、この二三年忠次の信任を得て、影の形に付き従うように、忠次が彼を身辺から放さなかつたことは、乾児こぶんの者が皆よく知っていた。浅太郎の声がつづくと、忠次の浅黒い顔に、ニツと微笑が浮んだ。

「喜蔵が一枚！」

喜蔵は、自分の名が出たのを、嬉うれしそうに、ニコリと笑いながら叫んで、

「嘘じやねえぞ！」と、付け足しながら、その紙を右の手で高く上げて差し示した。

「その次ぎが又、喜蔵だ！」

喜蔵は得意げに、又紙札を高く差上げた。

「嘉助が一枚！」

第三の名前が出た。忠次は、心の中で、^{ひそか}私に選んでいる三人が、入札の表に現われて来るのが、嬉しかつた。乾児達が自分の心持を、察してしてくれるのが嬉しかつた。

「何だ！ くろすけ。九郎助だな。九郎助が一枚！」

喜蔵は、声高く叫んだ。九郎助は、顔から火が出るように思つた。生れて初めて感ずるような羞恥^{しゆうち}と、不安と、悔恨とで、胸の裡^{うち}が搔きむしられるようだ。自分の手蹟^{しゅせき}を、喜蔵が見覚えては、いはしないかと思うと、九郎助は立つても坐つても居られな

いような気持だつた。が、喜蔵は九郎助の札には、こだわつていなかつた。

「浅が三枚だ！ その次は、喜蔵が三枚だ！」

喜蔵は大声に叫びつづけた。札が次ぎ次ぎに読み上げられて、喜蔵の手にたつた一枚残つたとき、浅が四枚で、喜蔵が四枚だつた。嘉助と九郎助とが、各自一枚ずつだつた。

九郎助は、心の裡で懸命に弥助の札が出るのを待つていた。弥助の札が出ないことはないと思つていた。もう一枚さえ出れば、自分が、三人の中に入るのだと思つていた。

が、最後の札は、彼の切ない期待を裏切つて、嘉助に投ぜられた札だつた。

「さあ！ みんな聞いてくれ！ 浅と喜蔵とが四枚だ。嘉助が二枚だ。九郎助が一枚だ。疑わしいと思う奴は、自分で調べて見るといいや」喜蔵は最後の決定を伝えながら、一座を見廻した。

誰も調べて見ようとはしなかつた。誰よりも先に、九郎助はホツと安心した。

忠次は自分の思い通りの人間に、札が落ちたのを見ると満足して、切り株から、立ち上つた。

「じゃ、みんな腑ふに落ちたんだな。それじゃ、浅と喜蔵と嘉助とを連れて行こう。九郎助は、一枚入つているから連れて行きたいが、最初はな云つた言葉をへんがい改することは出来ねえから、勘弁しな。さあ、先刻からえろう手間を取つた。じゃ、みんな金を分けて銘さつき

々に志すところへ行つてくれ」

乾兎の者は、忠次が出してあつた裡から、銘々に十二両ずつを分けて取つた。

「じゃ、俺達は一足先に行くぜ」忠次は選まれた三人を、麾さしまねくと、みんなに最後の会釈をしながら、頂上の方へぐんぐんと上りかけた。

「親分、御機嫌ごきげんよう。御機嫌ごきげんよう」

去つて行く忠次の後から、乾兎達は口々に呼びかけた。

忠次は、振り向きながら、時々、被かぶつている菅笠すげがさを取つて振つた。その長身の身体は、山の中腹おおを掩うている小松林の中に、暫しばらくくの間は見え隠れしていた。

取り残された乾児達の顔には、それぞれ失望の影があつた。

「浅達が付いていりや、大した間違はありやしねい！」

口々に同じようなことを云つた。が、やつぱり、銘々自分が入
れ札に洩れた淋^{さび}しきを持つていた。

が、忠次達の姿が見えなくなると、四五人は諦めたように、草
津の方へ落ちて行つた。

九郎助は、忠次と別れるとき、目礼したままじつと考えていた。
落選した失望よりも、自分の浅ましさが、ヒシヒシ骨身に徹^{こた}えた。
札が、二三人に蒐^{あつ}まつてているところを見ると、みんな親分の為を
計つて、浅や喜蔵に入れたのだ。親分の心を汲^くんで、浅や喜蔵を
選んだのだ。そう思うと、自分の名をかいだ卑しさが、愈々^{いよいよ}堪

えられなかつた。

朝の微風が吹いて来て、入れ札の紙が、熊 笹くまざさを離れて、ひらひらと飛びそうになつた。

「ああ、こんなものが残つていると、とんだ手がかりにならねえとも限らねえ」

そう云いながら、九郎助は立ち上つて散ちららばつてゐる紙片を取り蒐めると、めちゃめちゃに引き断ちぎつて投げ捨てた。九郎助の顔は、凄いほどに蒼あおかつた。

「俺おらあ、秩父ちちぶの方へ落ちようかな」

九郎助は独ひとりごと言のように云つた。彼は仲間の誰とも顔を合してゐるのが厭だつた。秩父に遠縁の者が居るのを幸に、其處で百

姓にでもなつてしまひたかつた。

彼は、草津へ行つた連中とは、反対に榛名の西南の麓はるな
ふもとを日ざして、ぐんぐん山を降りかけた。

彼が、二三町も来たときだつた。後から声をかけるものがあつた。

「おい阿兄あにい！ 稲荷いなりの阿兄あにい！」

彼は、立ち止つて振りかえ顧かえつた。見ると、弥助が、息を切らしながら、追いかけて來たのであつた。彼は弥助の顔を見たときに、烈しい憎惡ぞうおが、胸の裡に湧いた。大切な場合に自分を裏切つてはがらまだ身の振方をでも相談しようとするらしい相手の、図々しい態度を見ると、彼はその得手勝手が、叩たたき切つてやりたいほ

ど、癪に障つた。

「俺、よつほど草津から越後へ出ようと思つたが、よく考えてみると、熊谷在に伯父が居るのだ、少しは、熊谷は危険かも知れねえが、故郷へかえる足溜りには持つて来いだ。それで俺も武州の方へ出るから、途中まで付き合つてくれねえか」

九郎助は、返事をする事さえ厭だつた。黙つてすたこら歩いていた。

弥助は、九郎助が機嫌が悪いのを知ると、傍へ寄つた。

「俺あ、今日の入れ札には、最初から厭だつた。親分も親分だ！」

餓鬼の時から一緒に育つたお前を連れて行くと云わねえ法はねえ。浅や喜蔵は、いくら腕節や、才覚があつても、云わば、お前

に比べればホンの小僧つ子だ。たとい、入れ札にするにしたところが、野郎達が、お前を入れねえと云うことはありやしねえ。十人の中でお前の名をかいたのは、この弥助一人だと思うと、俺あ彼奴等の心根こころねが、全くわからねえや』

黙つて聞いた九郎助は、火のようなものが、身体からだの周囲に、閃いたような気がした。

「この野郎！」そう思いながら、脇差わきざしの柄つかを、左の手で、グツと握りしめた。もう、一言云つて見ろ、抜打ちに斬きつてやろうと思つた。

が、九郎助が火のように、怒つていよとは夢にも知らない弥助は、平氣な顔をして寄り添つて歩いていた。

柄を握りしめている九郎助の手が、段々緩んで来た。考えてみると、弥助の嘘を咎めるのには、自分の恥しさを打ち開けねばならない。

その上、自分に大嘘を吐いている弥助でさえ、自分があんな卑しい事をしたのだと、夢にも思つていなければこそ、こんな白々しい嘘を吐くのだと思うと、九郎助は自分で自分が情けなくなつて來た。口先だけの嘘を平氣で云う弥助でさえが考え付かないほど、自分は卑しいのだと思うと、頭の上に輝いている晩春のお天道様が、一時に暗くなるような味気なさを味つた。

山の多い上州の空は、一杯に晴れていた。峰から峰へ渡る幾百羽と云う小鳥の群が、^{きいろ}黃い翼をひらめかしながら、九郎助の頭の

上を、ほがらかに鳴きながら通つてゐる。行手には榛名が、空を
劃くぎつて蒼々と聳そびえていた。

青空文庫情報

底本：「藤十郎の恋・恩讐の彼方に」 新潮文庫、新潮社

1970（昭和45）年3月25日初版発行

1990（平成2）年1月15日第34刷

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年7月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつた

のは、ボランティアの皆さんです。

入れ札

菊池寛

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>